

安藤論文「アジア高地文明試論」をめぐる往復書簡

月原敏博¹⁾、安藤和雄²⁾

1) 福井大学教育地域科学部、2) 京都大学東南アジア研究所

本号掲載の安藤論文「文明観の再定義としてのアジア高地文明試論」に対する月原からのコメント、およびそれに対する安藤からの返事というメールでのやり取りの記録である。ここでは、都市と農村、農耕と牧畜の捉え方などを取り掛かりとして、アジア高地文明の代表例である「チベット」の核を何処に探ることができるかについて、意見が交わされる。

1. 経緯

本号掲載の安藤論文「文明観の再定義としてのアジア高地文明試論」の骨子は、奥宮清人氏が代表者を務める地球研「高所プロジェクト」の全体会議(2009年1月31日～2月1日開催、於地球研)の場で安藤が発表したものである。山本紀夫氏が提唱された「高地文明」は、当プロジェクトの存在意義にも関わる重要な論点であるが、その議論は必ずしも進捗していたわけではなかった。安藤は、その口頭発表で「アジア高地文明」についての自説を初めて明確に口にした。月原はその発表を聞いた一人であったが、安藤説には高所文明に対する独自の直観的な見方が含まれているとの印象を持った。

その後、安藤は発表内容を文章化し、草稿段階の「試論」を高所プロジェクトの一部のメンバーにメールで回覧したが、それに反応したメールを出した月原とのあいだでその内容をめぐる2往復のやりとりがあった。そのなかで、安藤は月原のコメントを「ぜひ何らかのかたちで同じ号に掲載したい」という考えを持った。また、その意向を受けたかたちでの編集代表者松林氏からの提案もあったため、メールで交わした互いのやりとりを小稿のようなかたちで残すことにした。

以下の往復書簡は、もとのメールの文章の体裁を整えたほか読みやすくするために若干の表現を修正したが、基本的には互いに交わされた原文のままです。最小限の修正に止めてある。そして、掲載に当たって参考文献を付した。なお、全体会議での山本発表と安藤発表の二つの発表を高地文明についての問題提起と受け止めた月原は、会議後、安藤の草稿を読むまでのあいだに高地文明に関す

る一意見をプロジェクトメンバーに向けてメールで発信していた。そこで月原が述べていたことも、二人のやりとりの前提としていくらか関わったところがあるので、それも記録として後ろに付けておく。

2. 月原→安藤 16 Feb 2009

////////////////////////////////////

Subject: Re: 老人智覚書

安藤様

ありがとうございました。高地文明と老人智についての安藤学説を読ませていただきました。大筋では大賛成で共鳴する部分は少なくないのですが、テクニカルな意味で少しだけコメントさせていただきます。

○「農村」について

ラサという都市を、もし「アジア高地文明の中心地」と考えると、この町は「農村」では決してなく、まったくもって「コスモポリタン」な都市です。チベットの真ん中にありながら、またそれを代表し象徴する所でありながら、チベットの一般の農村や遊牧地帯にはまったくないような異質の性格を多く持つ都市、それがラサだと私は感じています。

ラサのような都市を、べつにチベットの中心とも代表とも考えない見方は、成り立たないのではなく、成り立ちうと思います。チベットという高地文明の真価は、ラサのような中心都市ではなく一般の農村や遊牧地帯にこそある。そのような見方は、ありうと思います。たしかにそうかもしれない、と私も思います。

たとえば、11世紀にベンガルからチベットを訪れて新しい仏教を伝えたアティーシャのような僧侶、彼ら僧侶たちの文化には、都から離れた静かな場所を志向するところがあります。日本の高野山などもそうだったでしょう。しかしそういう、安藤さんが考えておられそうな文化（の少なくとも一つ）と、「農村」というのでは違う気がします。僧侶の文化を重視して言えば、農村であっても、瞑想の場所などは常に人里を少し離れる志向をもちます。日本の山岳修験道のようなもので、それは決して文字どおりの「農村」を志向しているわけではないのです。農村を含め、「人里は離れる」のです。

そして言わなければならないのは、チベットの農民たちが、遊牧民に対してもっていた小さくない劣等感です。農民よりも標高の高いところに住む遊牧民は、「(サダクなどと呼ばれた土地の神を怒らせるなどとして)罪が多い」とされた土をひっくり返す行為が不可欠の農民よりも、気高く誇らしい羨ましい生業だと、農民たち自身が長らく考えてきたところがあります¹⁾。近年でこそ牧畜は補完的、補助的な生業で学歴のない人や身体に障害を持つ人を優先的に割り当てる「劣った」生業のようになっている面もありますが、少なくともかつてはそんなものではなく、農耕などよりはるかに「誇らしい」生業だったのです。経済的な意味でも、農耕よりもチャンスに恵まれた面があり、交易業など新たな生業へと展開しうる可能性も秘めた、農民にとっても魅力に満ちた羨ましい生業でした²⁾。

天気の良いチベットで、胸を張って空を仰ぎつつ家畜を追う遊牧民に比べ、うつむいて土を相手にし、それをひっくり返す農民の、なんとしみつたれた（しかもチベット人によると土地の神の怒りと呼ぶ罪深い）生き様であるか。牧と農とを対比させた場合、そのような牧の優越と農の劣弱を、チベット人は感じる文化を長らくもってきていたことは言っておかねばなりません。

○老人智と関わる「老人評価」について

老人の評価についても、細かく言えば問題がありえます。儒教精神に基づく長幼の序に神経質な漢人たちが、チベット人を観察して嫌悪してきたことはまず二つ。

一つは、老人を敬わないことでした。漢人の目

からして、チベット人はあたかも「老人虐待」をしており、年老いた親が子のあとに従う、若者（壮者）のあとに従うことは、野蛮で好ましくないことでした。古代からそうなのですが、きっとおそらく現代でもそのようなチベット人に対する見方・感じ方は漢人のあいだに残っていると思います³⁾。

有能な、見識の優れた老人は、評価は高いのです。そして若者たちも、彼には従うのです。しかし、そのような見識を示せない老人の場合は、若者たちがそれを小馬鹿にし、敬老の精神などろくになような扱いをしてきた。それがチベット文化の現実でもあったのです。

川喜田二郎氏は、年齢を横軸にとった、人間的能力の年齢曲線（Talent Curves）を描いています⁴⁾。チベット人社会では壮年期ごろまではたいして個人差がないが、老年になるほど同世代のなかでの差が大きくなる。とくに40代以後は個人差がだんだんと広がっており、それ以後は能力を維持・拡張できる老人は壮年期と同等かそれ以上の評価を得続けるのに対して、年齢の進行とともに体力も「知力」も落としていく老人の場合は社会的評価も下がる。全体を均すと50代を過ぎると能力が下降してゆくという図になっています。そのようなグラフを川喜田氏は描いているのです。

もう一つ、古代から中国人が嫌ったチベット文化の慣習は、兄が亡くなったときに弟がその未亡人と結婚する嫂（あによめ）婚、あるいはそういう弟などがなければ父（にあたる老人）がその嫁と結婚したり、（腹が違えばその父の）子とその未亡人と結婚したりする風習でした⁵⁾。

この後者の点は、今回の安藤学説との関係はおそらく薄いのですが、前者の老人評価の点は、川喜田氏をはじめとする従来のチベット研究で知られてきたチベット文化における老人に対する評価とは、異なる点がありうることは知っておいていただきたいと思います。

以上、チベット研究の文脈を踏まえて言うと、「農村」とか「老人」という表現が、どれだけうまくチベット文化を捉えられているかについては疑問を呈さざるを得ない部分がある、ということです。これは決して安藤学説の足を引っ張りたくらいから言っているわけではありません。どう補強すればよいか、それを考えている最中で気になる点と

して、参考までにコメントさせていただきました。

月原敏博

3. 安藤→月原 17 Feb 2009

////////////////////////////////////

Subject: 月原さんのコメントについて

月原様

バングラデシュのハティア島からです。ここはサイクロンの常襲地ですが、1970年には50万人が高潮でなくなりました。高潮は6mを超えます。15のNGOで作っているEnvironment Coping Forumで、PLA (Participatory Learning and Action)を4日間行っています。KJ法が主なツールです。

月原さんならではのコメントをありがとうございました。私は、ラサはきわめて特殊な「都市」であると思っていました。月原さんに指摘されてその思いを再確認しました。青海省に出かけることで私がアジア高地文明を確信できたのは、牧畜のみを生業としているチベット族の人々の生活風景を観察したことと、短い時間でしたがテントに入らせてもらって、バター茶をご馳走になりながら彼らと会話をしたことが大きな裏付けとなっています。月原さんのような農耕民と牧畜民との違いを言葉として直接聞くことはできませんでしたが、少なくとも私は牧畜民が精神的にかなり違った高地文明の核となっていることは直感しています。

なぜ、チベットやアルナーチャルでは高地文明を確信できず、青海省であったのか、それは、チベットやアルナーチャルで私が出会ったチベット系の人々は主に農耕民であったことと、アルナーチャルのタワンやディランでは、農耕民が牧畜民に優越した農耕社会原理が支配的だからであったということもあげられます。農耕は、実は文明ではなくて文化を直感させます。文明は、非農耕的な要素で構成されるというのが、私がいまでも抜きがたく持っている文明観です。青海省での牧畜を生業とするチベット族の人々との出会いがなければ、今も恐らく川喜田二郎氏の高文化論に納得し、決してアジア高地文明を学問的にも受け入れることは困難であったろうと思っています。それほど、青海省でのチベット族との出会いは新鮮でショッキングだったのです。だから、月原さんの

指摘は、100%理解できます。

「農村」は、田舎の意味で使っています。農業を営んでいることのみを想定していません。都市に対しての表現なのです。Ruralと表現することが、一番しっくりします。

老人についてですが、青海省では、老人のことを聞くことができませんでした。実は、老人の知恵を重視しているのは、アルナーチャルの農耕民であるモンパ族との会話から得た実感です。土地の境界や所有に関して、老人に蓄積された「歴史的経緯」の知識が重要だというのがもっとも大きな理由だったのです。牧畜民であるアルナーチャルのプロッパ族では、老人は体が動かなくなると下の村に降ろされます(冬場の村。老人はこの村で一年を通じて定住する。ディランでは標高3000mくらいが目安となる)。川喜田二郎氏のご指摘の文献をまだ読んでいませんので、是非帰国後に読みたいと思います。恐らく、私は、牧畜民と農耕民では、経験や知識の質と種類にかなりの違いがあり、農耕民は蓄積型であるのに対し、牧畜民はとっさの処理型であるのことで問題解決には体力がともなうということが、仮説的に考えられるのではないかと思います。漁民の場合は蓄積型だと思います。インドも、中国も、日本も、まちがいがなく蓄積型の知識や知恵を重視する社会です。私や、老人の知恵を評価していた宮本常一も、その中で育ってきました。恐らく、西洋文明は、基本的には蓄積型ではないところに成立しているのではないかと、ということも月原さんのコメントから考えはじめています。

大変、刺激的な意見をいただきありがとうございます。是非、こうした会話を継続していきましょう。よろしく願います。時間がないので書きなぐりの文章ですが、ご容赦ください。 安藤和雄

4. 月原→安藤 17 Feb 2009

////////////////////////////////////

Subject: 聖地の引力があると思います

安藤様

私見では、チベットの都市(大集落の意味で言いますが)は、性格で大別すると2種類だったのではないかと思います。

一つは、聖地とくに参拝施設（＝寺院）をコアに発展した都市。日本で言えば門前町あるいは寺内町のような、寺社がもとになってできた都市です。ラサはまさにその例で、巡礼・礼拝の対象であるジョカン寺（その意味するところは「釈迦堂」です）を中心に発達しました。ラサの場合は、政治権力も古くからしばしばそこにあったので政治機能のほか経済機能、軍事機能などまでが集積しました。なので、政治都市とか商業都市、また近年は現代的な観光都市の性格も加わりました。

それと一見類似するがじつは異なるのは大学都市で、名僧が居ることで学僧が集まり、それが大きくなって仏教大学といえるようなものになり、僧坊の人口が多く僧侶たちが集住するためにそこが都市の様相を呈します。ラサ近くのセラ、デブン、ガンデンなどはその例でほかにも多々あります。日本でいえば、高野山などそうだったのでしょうか、福井の勝山に中世に存在していた平泉寺もそのような都市でした。この種の都市は人里から少し離れたところにあるのが普通で、つまり農村地帯からは少し離れていて、また主要な交易路からもある程度は外れているのが普通です。なので、名僧が居なくなるとか、政治的・軍事的な争いなどで教団自体が取り潰されるとかすると、こういう都市は廃墟のようになって様相を一変させてしまうこともあります。都市というよりお坊さんたちの団地といったほうがよいのかもしれません。

聖地などとは関わりの薄い、ポートオブトレードなり市場町が成長してできた交易都市・商業都市といえるものも、ないではありませんが、乏しいと思います。宿場町の性格を持つ小都市はもちろんそここにあります、それは農村に毛が生えたようなものが多いと思います。近年は、もちろん道路交通の発達に関わってバス旅行者や運転手のための宿屋の機能をもつものは増えているでしょうが。

近々5、60年の間に顕著にあらわれた都市のタイプとして、人民解放軍が駐屯してできた軍事都市があげられます。政治と軍事のためにいま漢人が大多数を占める空間として成長していますが、ラサなどのように、もともと存在したチベット人の町に隣接してこれが作られる場合は、チベット人が多く住む旧市街地を取り囲むように、これが発達しています。チベット人の空間を包囲するの

です。してしまう、あるいは自然とそうせざるをえないというべきか。解放軍は、チベット人が住んでいなかった土地でも駐屯地を持っています。そこは、チベット人が作っていた昔からの町とはまったく違う居住区になっていることは誰でも想像がつくでしょう。

この最後の軍事都市というか「駐屯地」というのはじつは解放軍が来るよりも以前から存在した性格であるところがあります。チベットの辺境では、過去にチベットの兵士たちが駐屯したことが契機となって都市が成長したとみられるところがあります。

チベットの地方、辺境での政治支配の中心は、もともと、役所と政府僧院が合体したゾーンと呼ばれた、城砦を兼ねた県庁でしたが、そこは役人が政務に当たるほかに、軍事の中心でもありました。県知事は、その地域の軍事長官を兼ねることも多々あったほか、交易の実施と監視、徴税の主体でもありましたので、地方政治の中心であるゾーンには、商業機能や軍事機能もあわせてもつものが多かったのです。宿場機能ももちろんです。日本で言うと、城下町にちょっと近いといえるかもしれません。

以上をまとめると、伝統的に発達していたチベットの都市は、宗教関係の「引力」がコアになって発達した「聖地」型あるいは「僧院」型の町と、政治・軍事関係の意味合いが濃い「ゾーン」型の町、の二つにおおよそ大別できたのではないかと思います。現実にはラサのようにどちらの機能も兼ね備えるケースも少なくなくしばしばオーバーラップもしているのですが、性格としては分けて考えておいたほうがよい気がしています。

長々と書いてしまいましたが、安藤さんの学説との関係で重要と思うのは宗教に関わる「引力」です。面白いのは、聖地・巡礼地・礼拝地には、ラサのような町のなかにあるものもあるが、チベットでは山や湖や大きな岩などが密教的な power place として信仰上大きな役割を果たしており、それがあちこちに、それこそ無数にあることです。御岳や白山などにかつて日本人は信仰登山をしてきましたが、そういう霊山、霊地が国土のあちこちに無数にある。人里を離れた、とくに高いところにあるのが普通ですね。

そういう巡礼や祭祀の対象地では、聖山カイラ

スのように、巡礼者の群れが滞在する宿場町かテント村のようなものが恒常的なものとして出現することもあるのですが、ツァリ山のように12年に一度しかそれが出現しないような、間歇的に出現して「まち」に類する様相を呈することもある。

安藤さんが強調する rural は都鄙の鄙の方ですが、その重要性にはそういう聖地の所在、分布ということが関係するように思います。チベット人は、大自然のなかにある諸物に神聖な意味を付与したのですが、もしかすると聖地をわざとそのように配置したのかもしれませんが。 月原敏博

5. 安藤→月原 Thu, 19 Feb 2009

////////////////////////////////////

Subject: Re: 聖地の引力があると思います

月原様

メールありがとうございました。もし、可能であるならば、是非、適当なタイトルを考えていただき、私の発表、試論に関しての月原さんのコメントをヒマラヤ学誌に投稿していただきたいのです。私はチベット人地域で十分なフィールドワークをしていません。そういう状況でアジア高地文明に言及するのは、時期尚早かとも思いましたが、青海省での経験があまりに大きなショックであったことと、高地文明論を皆さんと共につくっていく必要を感じて、発表することにしました。内容は、今後議論やフィールドワークで修正もしくは変更されていくことでしょう。そのためにも、月原さんのコメントを是非掲載していただければ、読者は安藤のバイアスを取り除くことができると思います。

私の Rural はもちろん、鄙ですが、＜まち＞を含むものであり、月原さんご指摘の聖地のまちを含むものです。

是非、この議論を今後もつづけていきましょう。

安藤和雄

6. 月原→プロジェクトメンバー 02 Feb 2009

////////////////////////////////////

Subject: なぜ高地、そして高地文明なのか？

昨日、一昨日は山本発表と安藤発表で高地文明

のことが各人に問われた、と思います。これをなぜ強調しなければならないかについて、私見を述べさせていただきます。一意見として参考にできれば参考にしてください。

私は、一言で言えばそれは「高地連関の問題なのだ」と思います。ここで高地連関と言うのは、人口が多い低地でなく、かえって高地の方に文化的・政治的に高度な統合が見られるということで、「低地のほうがむしろ分裂してきた面があるのではないか」という理解を含んでいます。地球上の文化史、文明史のうえで、これはきちんと考えられなければならない問題の一つです。

川喜田二郎氏が、ネパールで、低所を占めるインド文明はともかく、中間山地以上では高所を占めるチベット文明の方が高文化なのであって、ヒマラヤの中間山地は半文明・半トライバルの文化が占める地域なのだと聞いたことを思い出してください⁶⁾。ヒマラヤでは、中間の高度かつ温帯に属する中間山地のほうが文化的には後進地域であり、3000m 以上（で安定すると彼が言ったところ）のチベット文化のほうが文化レベルは高いのです。政治的にも、高地の方に広域的統一が見られ、中間山地はそれぞれ小水系や小尾根に遮られて棲みわけられるかのように小人口の民族や国家が寄り添うモザイク地帯（＝分裂地帯）になっているのです。東南アジアでも、中・低地はその水系や地形に応じるかのように民族・国家が分立しているだけだともいえます。チベットとの中間部を占める雲貴高原などを根城とした民族が、大国家として勢力を伸ばし、巨大な文化中心となったこともあります。（南詔王国とか照葉樹林文化は、あるいはそういう性格をいくらかもったのかもしれませんが…）

インダス、ブラフマプトラ、サルウィン、メコン、長江、黄河などのアジアの大河川。その下流部はそれぞれ異なる民族や国家の世界を形成したといってよいのに、上流部がすべて「チベット」として統一されてきたことを忘れないでください。

地形はいろいろ考えさせられる問題を持っていますが、チベットはどこにも負けないほど「山だらけ」でそういう地理的障害はいくらでもあったところなのに、水系も尾根も軽々と乗り越えて、一大連関、一大統一が生じたところであることを

忘れないでください。インドや中国という「高文化」の大地域でさえ、水系（インダス水系とガンジス水系、黄河と長江）やリッジは、いまだに等閑視は出来ない政治や文化の仕切りになっているところがあるではありませんか。

13世紀のモンゴルも、一つの「高地連関」だったと思います。その本拠地は標高千メートル程度の低い高原にすぎないのでそれは高地と言うより「内陸連関」と言うべきものだったかもしれませんが、じつに東アジアから南アジア、西アジア、さらにヨーロッパにまで及ぶユーラシア全域の「一大連関」を遂げようとしていたのです。もっと以前のことを辿ると、史上最初の「世界帝国」を築いたと言いうるアケメネス朝ペルシアは、標高2千メートル弱のイラン高原に中心をおいて、地中海沿岸からメソポタミア、そしてインダス川流域や中央アジアのアム川流域にまでまたがる広域を統一したのであり、その本拠地は低所の河谷平原にあったわけではありません。

「高地連関」、「低地分裂」といいたいのはそういうことです。南米のアンデス高地や、チベット（とくに吐蕃と呼ばれた古代王国期のチベット）は、海拔高度の点からしても、「高地」を冠するにふさわしい「高地連関」の例であり、高地文明と呼ばれるべき性格を疑いなく持っていたと思います。エチオピア高原も、メキシコ高原も、そうであっただろうと思います。

われわれ日本人を含め、先進国・途上国の支配的人口は、地球の文明は人口規模も都市の規模も低地の圧倒的な中心性のもとで展開したことが自明であるかのように感じています。そして、地球の文明史は、地理的にはたしかに低地の河川文明を主に（そしてそれが先行して）展開したのかもしれません。しかし、高度や地形を意識することで浮かび上がってくるこの「高地連関」の問題こそ、文明史・文化史研究のうえでなぜ高地に注目するのか、そしてなぜ高地文明というものを考えざるを得ないのかの一つの理由と言えると思います。

医学、生物学、その他の自然科学の領域からの、理由付けはまだまだあると思いますが、文系の地理屋として、文明史を想起して私が感じることは以上のようなことです。ここで述べた「高地連関」は、もう20年も前の院生だった頃に、指導を受

けた応地利明先生との議論の中で示唆された概念で、それに私なりの解釈を施したものです。

文明についての議論はいろいろありますが、私は、次の点が重要だと思います。文明は、「民族や国家を超えて、広く受け容れられる事物」でありそれを生んでいることが文明の担い手や文明地であることの条件。 月原敏博

参考文献

- 1) Ekvall, Robert B. 1968 *Fields on the hoof: nexus of Tibetan nomadic pastoralism*. New York: Holt, Rinehart and Winston. 100p.（文中で言及したことは pp.1-3.）
- 2) Downs, James F. 1964 Livestock, production, and social mobility in high altitude Tibet. *American Anthropologist* 66, pp. 1115-1119.
- 3) 佐藤長 1973 吐蕃伝(旧唐書・新唐書). 羽田明・佐藤長 他(訳注)『騎馬民族史3 正史北狄伝』(東洋文庫 228)、平凡社. pp.103-291.（文中で言及した老人を賤しめることは p.107 と p.210）
- 4) Kawakita, J. 1957 Ethno-geographical Observations on the Nepal Himalaya. In Kihara, H. ed., *Peoples of Nepal Himalaya (Scientific Results of the Japanese Expeditions to Nepal Himalaya 1952-1953, Vol. III)*. Fauna and Flora Society, Kyoto University. pp. 1-362.（文中で言及した図は p.349）
- 5) 山口瑞鳳 1987 『チベット 上』、東京大学出版会. 337p.（文中で言及した嫁婚は pp.114-118.）
- 6) 川喜田二郎 1977 中部ネパールヒマラヤにおける諸文化の垂直構造. 『季刊人類学』8(1)、pp.3-80.（この論文のほか、文中で言及したことについて川喜田が記した文献は数多い。）

Summary

Correspondence on Ando's "Essay on Asian Highland Civilization"

Toshihiro Tsukihara¹⁾, Kazuo Ando²⁾

1) Faculty of Education and Regional Studies, University of Fukui

2) Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Some comments were exchanged between Tsukihara and Ando on Ando's "Essay on Asian Highland Civilization" in this issue. This article is a record of the correspondence between the two. Though Tibet could be looked as a case of Highland Civilization in Asia, where-about of its cultural core need to be carefully discussed. They do it by exchanging ideas on urban/rural and agricultural/pastoral characters of Tibetan tradition.